

課題文は「教育における学び」すなわち「理解している」とはどういうことかを問題にしている。「理解していること」と「理解して得た知識を新しい場面に適応して実際にやってみること」を対立的にとらえるのではなく、理解したかどうかというのは、それを実際にやってみることによってのみ評価されるのだと述べている。

問1 下線部(A) (B)を訳しなさい。

(A)

使われている表現は次の通り。whenver が「～するときはいつでも」、apply A to B (A を B へ適用する)、関係副詞の非制限用法などいずれも高校学習範囲以内。しかし単語は高校学習範囲を超えている。実際に自分である程度のレベルの英文を読んでいなければいけない。今日の平均的な大学生でも辞書なしでは読めないだろうと思われる。

(解答例1 安倍訳)

ある教育環境で得た知識、概念、技術（これ以降、知識と略す）を新しい例や状況に、そこでは知識が実際に関連を持つのだが、適用させることができる時はいつでも、人は理解していると言えるのだ、ということを私は議論した。

(解答例2 河合塾訳)

人が理解するとは、何らかの教育の場で得た知識、概念、スキル（この後は、略して単に知識とする）を、実際のその知識にふさわしい、新しい場面や状況で適用できることである、と私は論じた。

(B)

文法ポイントは特にない。しかし単語が難しい。DB5500（桐原書店）レベル4収録単語が必要。apprehend（理解する）appreciate（価値がわかる）などは相当英文を読み込んでいないと覚えられない。また日本語にしにくい表現をいかに日本語らしく表現するかも問われているようだ。「パフォーマンス」は、やはり日本語にしたいところ。

(解答例1 安倍訳)

だが詳しく調べてみるとわかるのだが、以下のことは明白な事実である。つまり、理解というものは、生徒がそれを実際に使用する時にのみ、理解していることがわかり、またその価値が認められるものだ。

生徒が物理学の原理を理解しているかどうかを知ることができるのは、その生徒が関連した実際上の行動を示すからである。例えば、こういう場合の実際上の行動とは、次のような行動を含むことである。

実験器具を作ることや修理することや、2つの変数間の関係を説明できるような公式を当てはめてみること、またはある環境下で2つの物体が衝突するときに何が起きるか予測できることなどである。

(解答例2 河合塾)

しかしながら、より細かく検討すると、理解は生徒によってそれが実行される場合にのみ、捉えられ、評価されることは明らかである。ある生徒が物理学の原理を理解しているかどうかは、当人が適切なパフォーマンスを示せなければ分らない。そうしたパフォーマンスとは、何か装置を組み立てたり、修理したり、2つ以上の変数の関係を説明するのに数式を正しく用いたり、あるいはある状況下で二つの物体が衝突した時に何が起こるのかを予測したりすることである。

問2 設問省略

(考え方)

教育改革ははっきりと述べられていないので、課題文の後半、下線部（B）の後の部分を用いてを用いて改革の方向を自分の言葉で提示すること。100字ではすべてを説明できなので核心を押さえること。

(解答例)

理解の達成はパフォーマンスを通じてしか示されないという事実に基づき、理解とパフォーマンスを対立的に捉えるのではなく、適切なパフォーマンスを通じて理解を評価できるように教育のあり方を変革すること。

問3

筆者の教育観を踏まえて、教室の中で実現するには何が問題で、どう解決すれば良いかを、あなたの体験に基づき、600字以内で述べなさい。

(考え方) まず、押さえるべきポイントと割合を考えよう。200字はほぼ4文で構成される。

1 筆者の教育観をまとめる = 200字

2 教室の中で実現しようとする場合の問題点（自分の体験で） = 200字

3 その解決方法（自分の体験から発した自分の考えで）述べる = 200字

(模範解答省略しました)